

第 30 回庭野平和賞贈呈理由

庭野平和賞委員会は第 30 回庭野平和賞をグナール・スタルセット師に贈呈することを決定した。庭野平和賞は、スタルセット師による顕著にして忍耐強い平和への努力を顕彰する。正義に基づいた恒久平和の実現に向けて何が必要で何ができるのか、宗教の思想、宗教的理想、宗教組織はどのような貢献が可能か、彼の半生とその職務は、まさにそれを例証するものである。スタルセット師の智慧と平和への道を求める人類に向けられた貢献に敬意を表し、庭野平和賞を贈呈する。

スタルセット師は長年にわたり、世界中のあらゆる地域とさまざまな分野において揺るぐことなく職務を遂行してきた。彼が決断力に富み、有能で、クリエイティブな資質を具えていることは、希望を失うことをよしとせず、勇敢に、紛争終結と正義に基づいた恒久平和実現への道を歩むために、必要な行動を続けてきたことが証明している。それが、重要かつ持続性のある結果を生み出し、数百万人の人々に影響を与えることができた理由である。彼は深い精神性と社会正義や人権の向上への情熱を、政治・宗教・市民社会・企業のリーダーと協働する決意に結びつけている。数多くの諸宗教組織における彼のリーダーシップは、世界中で、とりわけヨーロッパにおいて宗教協力活動を活発化し、宗教協力に対する国際社会の信頼の向上につながった。彼は最も立場の弱い人々や苦しんでいる人々をはじめすべての人間に対する慈悲の心、自然への敬意、公正な未来社会の実現を信じる心、そして現実に変化をもたらそうとする決意を併せ持っているという稀有な世界的リーダーである。異なった意見にも常に進んで耳を傾けながら、権力者の前でも真理を語り、邪悪な権力を識別する勇気も備えている。彼は合意を大切にし、意見を異にする者すべてを話し合いの場に導き入れる一方で、より大きな合意に至る道を探求することにも躊躇しない。

スタルセット師は、まさに庭野平和賞が意味するものの象徴的存在である。すなわち確固とした精神的な価値観に基づいて、人々の心に変革をもたらす思いやりに満ちたリーダーであり、違いを理解し、違いを大切にし、正義と慈悲が持つ重要な価値を揺るぐことなく追求し、半生を通して平和への職務を実践的に進め、そして未来に希望を持っている。歴史や今日の現実社会に関するグローバルな視野と知識を備え、また何が紛争を引き起こし、何が和解をもたらすのか、個々の問題の人的側面に関する深い理解を有している。彼の精神のルーツであるキリスト教の信仰は、倫理や道理の面で大きな原動力となっている。宗教が有する善に向かう力に対し、そこには不足があることを認識しつつも、彼は深い信頼を寄せ、またあらゆる場所で宗教と表現の自由が守られるように身を挺して行動している。いかなる状況においても物事の細部に分け入り、それをより広い世界的な場面に据えて対処するスタミナと忍耐力、決意を彼は備えている。

スタルセット師は、ノルウェー最北の人里離れた地域に生まれ、子供時代には貧困と民族差別を経験した。そういった若い頃の体験は、教育によって可能性が開かれることや、地域の連帯がもたらす恩恵を大切に作る心につながっている。神学研究、教会の仕事、政治活動、健康に関する初期の職務を通じた取組みが互いに結びつき、彼はルーテル世界連盟の事務総長、神学校の学長、オスロ監督として、さまざまな社会と分野で経験を積み、人々の尊敬を集めた。長年にわたり諸宗教対話に向けた数多くの役割を果たす中で、彼は世界宗教者平和会議（WCRP）などの組織の発展に関わり、宗教対話が社会を変える力を備えていることを世に示した。例えば、H I V/エイズの世界的な流行が、宗教者にとって神の愛と隣人への愛を例証するために共に行動することを求める霊的なチャレンジなのだと思われ受け止められるようになったのは彼のリーダーシップによるものである。そして、H I V感染者・エイズ患者に対しての宗教的観点からの差別や排除を取り除くことが可能になった。

スタルセット師は長年にわたり、ノーベル平和賞委員会の主要メンバーを務め、その選考過程の中に、精神的な価値観とともに世界平和に役立つリーダーシップとは何かを見極める視点を提供している。

数十年の長きにわたり、スタルセット師は世界の多くの地域において平和活動の先頭に立って教導を続けた。その活動の幅の広さに、平和賞委員会は大きな感銘を受けた。グアテマラ、スリランカ、バルカン諸国、ティモール・レステ（東ティモール）、ミャンマー（ビルマ）、ナミビア、キルギスタン、その他の多くの紛争地域で、彼は平和活動の主要な役割を果たした。異なったグループの意見に耳を傾け理解する上で模範となる能力を発揮し、紛争の当事者自身が新たな解決策や譲歩策を見出せるよう、支え励ますことのできるクリエイティブな仲裁者として彼は注目を集めている。赦しを促す活動をする傍らで、彼は力の不均衡やマイノリティーの排除、汚職の蔓延などの問題に対して、恒久的な組織を作り対処していく必要性にも深い理解を示している。また、彼は賢明な代弁者である。忘れ去られた者を決して忘れず、マイノリティーの視点や被害者の声を取り入れ、正当で実務的かつ有意義な方法で、女性の参画を進めている。常に誠実で率直な人物であるが、思いやりの心や慈悲心も決して忘れることはない。

スタルセット師は、世界宗教者平和会議（WCRP）や欧州諸宗教指導者評議会（ECRL）のリーダーとして、国際的な諸宗教間協力活動の創設と発展に中心的な役割を果たした。宗教伝統においても、また政治や社会のシステムの一部である宗教者個人においても、あらゆる宗教には貢献すべきものがあるという信念を彼は持っている。その信念は、実践や結果に対する強い関心と同様に、諸宗教間対話へのアプローチのあり方に影響を与えた。すべての宗教者は自分自身の心の奥底にある自己批判の声に耳を傾け、そして他の宗教を批判する前に、まず自らが自己批判の声にならなければならない、と彼は主張する。

スタルセット師のリーダーシップの特徴は、常に勇気と慈悲心と人間の強さや弱さを理解する心が、その中に調和しながら存在してきたことにある。彼はいかなる場所においても常に尊敬される存在であり、彼の半生を通じた活動は我々すべての手本となるものである。